

Title	若きマルクスとサン・シモニスム： マルクシズムとフランス社会主義との関係に関する研究の一節
Sub Title	Jeune Marx et le saint-simonisme
Author	平井, 新
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1962
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.55, No.3 (1962. 3) ,p.209(1)- 234(26)
JaLC DOI	10.14991/001.19620301-0001
Abstract	
Notes	社会思想史研究特集 論説
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19620301-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19620301-0001</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新刊紹介

尾藤正英著『日本封建思想史研究』	島崎隆夫	105
武田清子編『思想史の方法と対象』	中村勝己	106
——日本と西欧——		
丸山真男著『日本の思想』	石坂巖	108
田村秀夫著『イギリス革命思想史』	寺尾誠	109
——ピューリタン革命期の社会思想——		
E・フロム著『マルクスの人間概念』	由良君美	111

若きマルクスとサン・シモニスム

——マルクシズムとフランス社会主義との

関係に関する研究の一節——

平井新

マルクシズムは十九世紀の三つの大きな思想的潮流、すなわちドイツの古典哲学、フランスの社会主義、イギリスの古典派経済学をその源泉とし、かつ、その構成要素としていわれている。この説明の仕方はすでに久しく行われているところであり、また異論のないところである。

それでは、これらの三つの要素が順次、マルクスに撰取されて、マルクシズムの体系を構成して行ったその過程についてはどうであろうか。

マルクスはまず、当時盛行したヘーゲルの観念哲学の研究に出發してその革命的要素である弁証法をとり入れた後に、フオイエルバッハの唯物論の媒介によって、ヘーゲルの観念的要素を脱皮して、唯物弁証法と唯物史観という独特の世界観に到達したが、これと前後してフランス社会主義を研究して社会主義への信念を固め、最後にイギリスの古典派経済学を学んで資本主義の必然的崩壊と社会主義の必然的到來を實証的に説明することができた。とこのように説明するのが大体これま

若きマルクスとサン・シモニスム

での通説となっている。

筆者はこの通説に対していささか疑問をもつものである。その疑問というのは、ヘーゲルの哲学とフランス社会主義とがマルクスによって撰取されたその時期の前後の問題に関連する。筆者の見るところによれば、マルクスはヘーゲルの哲学を研究する以前にすでにフランスの社会主義者サン・シモンを知り、その影響をうけていたと考えられる。本稿はこの趣旨のために書かれたものであるが、なお文献渉猟の不足などで充分意をつくしてないと思う。またマルクスによって撰取されたところのサン・シモンがマルクスの初期作品の中にいかに反映されているか、その影響の理論的検討は紙面の都合上次の機会に譲りたいと思う。

## 二

人間は、その中に生れて社会的に自覚をもつまでに成長した自然環境の影響を終生身につけているといわれるが、マルクスが生れて青年となるまでに生活したライン地方とはいかなるところであったか。

ライン地方はドイツの国土でありながら、地理的にも文化的にもフランス的であった。殊に十八世紀末から十九世紀初めにかけてフランスの啓蒙思想と革命の影響を身近に体験して、逸早く進歩的な精神に目醒めていた。フランスの文明批評家、経済地理学者で「民族の心」(L'âme des peuples 1850)の著で令名高いシークフリード教授のいうところを聞こう。

「我々フランス人にはラインの溪谷は我々の近郊で、そこへ行ってもエトランジェの感じをうけない。ケルン、ファルツ、シュヴァルツワルトの自然は依然として我々に親しみ深い。わが国における同じような種類の樹木、同じムード、すでもっと大陸的であるとはいえ同じような気候。その雰囲気によって、アルザス、スイス、オーストリアに密接につながるライン地方は、ある意味ではフランスの東部の諸州にもつながっている……。そこは文明の伝統によって、大陸で最も本質的

にヨーロッパ的な地方の一つである。ライン沿岸のドイツは、この点において、西欧文明の一部であり、フランス、イギリス、あるいはイタリアと同じ資格でそれを表現し、代表している。ローマ(古代)の勢力はこの問題においては決定的な因子としてあらわれていることに注意しよう。古代ローマは、その支配したいたる処に拭い得ない足跡を残した。フランス革命が西欧の空気をもたらしたのも、ほぼこの地域内である。ライン地方は今日でも、他の地方にくらべて、我々の考え方に近い。民主主義についての考え方、また個人や財産についての西欧的な考え方が見いだされる。西部とくに西南部のドイツ人はサクソン人やプロシヤ人にくらべて、ずっとよくフランスとフランス精神を理解しうる。この地方の特徴は快適な生活のための立派な組織、ドイツ人が文化と区別して文明と呼んでいるものの中にあらわれている。社会的施設、都市計画については進歩はフランスやイギリスより進んでいる。<sup>(1)</sup>

このライン地方のトリエル(トリールともいう)の町とはいかなるところであるか。

トリエルはドイツ最古の都である。ライン河とモーゼル河との合流点にコブレンツという風光明媚な古都があつて、ここからモーゼル河を約百四十キロ溯ったところに「ぶどう豊かに実り、ローマ人の住みつきしところ」トリエルの町がある。キリスト降誕前十五年、当時のローマ皇帝アウグストスによって初めて築かれたこの町は大ローマ帝国の北西辺の守を固める要衝であると共に皇帝の行在所(紀元三三四世紀)でもあったから、今日でも皇帝のローマ風呂、円形競技場をはじめ大ローマ帝国の昔日を偲ばせる数々の遺跡をとどめている。かつて西のローマの文化はこのトリエルから東のドイツに入ってきた。トリエルはまたキリスト教世界においても特に重要な地位をしめている。ローマ時代の古い建物の上に十一世紀ごろ改築されたカトリックの大寺院は代々この地方の教区を中心として大司教の座となってきたばかりでなく、この大寺院には、キリストが十字架を負って死についたときに身につけていたといわれる衣類が保存されているので、これを拝観するためにこの古都を訪れる人は今も絶えない。

このような由緒ある古都にカール・マルクスは、一八一八年五月五日、ユダヤ系弁護士、ハインリヒ・マルクスの第二子として呱呱の声をあげたのである。その生れたブリュッケン通り六六四番地（今日では九一番地）の家は第二次世界戦争で空爆のために大被害をうけたが、一九四九年に復旧され、今日ではドイツ社会民主党支部で管理されている。トリエルの人口はマルクスの在世の当時一一、四〇〇、今日は約八〇、〇〇〇、芳醇なモーゼル・ワインの集散地として今でも広く知られている。このように歴史の古い都ではあったがフランスの文化の影響をうけることが最も早く、そして市民は最も深く早くから自由主義の精神にめざめていた。

(1) Siegfried, André; *L'âme des peuples*, 1950. 邦訳「民族の心」一九五三年、一二四―一二五、西欧の精神（角川文庫）一〇六一―一〇八、昭三六。

## III

マルクスが生れた前後のドイツの一般的状況はどんなものであったか<sup>(1)</sup>。

フランス革命前夜のドイツは依然として神聖ローマ帝国という名称で呼ばれてはいたが、それは名ばかりで、三百に上る小邦国に分裂し互に抗争をつづけていた。それはヴォルテールが皮肉にも評しているように「神聖でもなく、ローマでもなく、帝国でもなかった」のである。このような不統一に加えて、その内面は実にフランス以上の旧態と中世さながらの有様であり、雄邦たるプロシヤは官僚主義と軍国主義とをふまえた強力な絶対主義を築いていた。このような状況はライン地方においても略々同様であり、この地方ではフランス啓蒙思想の影響を強くうけて、ブルジョワが抬頭せんと気配を示したが、大勢は依然として封建制の重圧の下に屏息していた。絶対主義的権威と保守的伝統の抑圧から逃避するために知識人は

美と観念の世界に沈潜する以外に道はなかった。貧困と圧制のドイツに最も美しい文学と最も深遠な哲学とが開花したのは蓋し自然の成行である。

隣国フランスに革命が勃発したときのドイツの状況はこのようなものであった。だからこそドイツ人はバステューユに上った革命の第一声をさながら凱旋譜のように聞き、人権宣言の発布を天来の福音の如く狂喜したのである。カント、シラー、ヘーゲルら当時の代表的なドイツの知識人が革命を讚美したことはいうまでもなく、殊にかねて進歩的なライン地方、殊にトリエルにはフランス礼拝の風潮がひろがって、方々にジャコバン・クラブがつくられ、ドイツ人にして革命に馳せ参するものも少なくはないという有様であった。

ナポレオンの出現は事態を一変させた。彼の相つぐ遠征は全く露骨な帝国主義的侵略の典型であって、そこには、もはや当初フランス革命軍が抱いていたような「自由のための聖戦」といった意義は失われてしまった。しかし、あたかもカール大帝によって中世ヨーロッパ世界の基礎がつくられたように、ナポレオンの軍事的遠征によって全ヨーロッパの近代化の促進という予期されなかった現象が生れた。ナポレオンによって封建的旧体制の撤廃が強行され、彼の相つぐ武力征服のために十九世紀最大の政治原理たる民族の自由の問題が提起されるに至ったのであるが、その影響の最も強く現われ、またそれ以後のヨーロッパの歴史に重大な結果をもたらしたのはドイツであった。

無論、分裂と抗争に悩む瀕死の神聖ローマ帝国は到底ナポレオンの敵ではなかった。彼は一八〇六年に西南ドイツの十六邦国を糾合してライン同盟を結成し、これを拠点としてプロシヤとオーストリアとを屈服させようとした。彼はライン地方と南部地方につくった国々における封建制の破壊には一層意を用いた。そこでは封建体制に代ってナポレオン法典が導入され、営業の自由、居住移転の自由、土地売買交換の自由等、いわゆる近代市民社会の法原理が実現されるに至った。ドイツの封建制はこの一角から崩壊して行った。

ナポレオンの登場を機として推進されつつあった近代化の過程は彼の没落によってあえなくも中断されるに至った。そしてこの近代化の阻止のために必死の工作をしたのが、ウィーン会議によるメッテルニヒ体制であった。彼は革命を目して「社会秩序を呑み込む海蛇」であるといい、議会政治を治者被治者双方の責任の欠如に導くところの「永遠のトンぼ返り」と冷笑し、人民の自由は社会の健康が保持されれば治癒される病気にすぎないと考え、テロや無政府に外ならない民主主義を弾圧することを以て自己に与えられた神の使命であると見た。このために一八一五年に結成されたのが神聖同盟であった。ここに革命と思想の弾圧時代が始まった。かつて圧制者ナポレオンに向けられた抵抗は今や自国の絶対君主たちに向けられた。

(1) 小松春雄、近代欧州政治社会史(一九五七)による。

## 四

このような反動主義に覆われたドイツにおいて、自由主義者は何をしていたかといえば、彼らはドイツの統一と共和的憲法の獲得に努力した。この自由主義運動を支えていたものは知識層やブルジョワであったが、しかしその実践的組織としては一八一五年、イェナ大学生を中心として結成され、やがて全国的に波及した「学生組合」(Die Burschenschaft)とハイネ、グツコー、ラウベ、ムント、ヴィーンバルク等の文学者から成る「若きドイツ」派(Das junge Deutschland)とがあっただけである。プロシヤ政府の反動化に憤激した大学生達は一八一七年にワルトブルク城に集合して、ルッターの宗教改革三百年祭とラ イプチヒ戦勝を記念する祝典を催したが、その際篝火の中に当時のドイツの絶対主義の理論家であったハラー(Karl Ludwig von Haller)の著書やプロシヤ槍騎兵の軍服を投じて歓呼した。メッテルニヒはこの事件を契機として次第に過激化してゆく学生の自由主義運動を徹底的に弾圧すべく諸邦国の君主をカールスバードに招集して、言論出版の検閲、制限、大学の監

督、学生結社の制限、解散等を決議した。このような弾圧政策にあつて自由主義運動は表面全く逼塞してしまつた。一八一五年、当時のヨーロッパで憲法と議会とをもつていた国は、イギリス、オランダ、スイス、フランスおよびライン地方だけであつた。暗い、不気味な静寂がドイツの公的生活を支配していた。

果せる哉、七月革命勃発の報はこの静寂を破つてドイツの国民を震駭させた。久しく雌伏していたドイツの自由主義者は祖国の統一と自由、民主的憲法を要求して一斉に決起した。一八三二年五月に、ドイツの自由主義者たちは一八一八年に発布されたババリア国憲法制定記念祝賀を口実としてハンバツハ城下に全ドイツ国民の集会を催して、祖国の統一と自由、民主的憲法を要求した。会する者約二万、学者、学生、手工業者その他あらゆる社会層の人々を網羅し、少数のフランス人、ポーランド人も加わつた。

ここにおいてメッテルニヒは直ちに此の祭典を高圧的に解散させ、そしてこれを機会にあらゆる自由主義運動を再び立つ能わざるまでに粉砕することを決意した。連邦議会はカールスバードの決議を再確認し、出版の自由、集会の権利を剝奪して、自由主義運動の取締りを一層厳重にした。このようにして再興しなかった自由主義運動は再び峻烈な弾圧のため後退するの止むなきに至つたが、なお一部の急進分子は極秘裡に結集してフランクフルト連邦議会の襲撃をはかった。

ハンバツハ祝祭やフランクフルト連邦議会襲撃陰謀に参加した二千に近い人々は、あるいは検挙され、あるいは追放され、あるいは投獄され、あるいは逃亡した。このように外国に逃亡したドイツ人亡命者の一群こそ、外国におけるドイツの最初の社会運動を担つた人々であつたことを忘れてはならない。詩人ハイネをして「今は自由思想に対する大狩猟時代である」と痛嘆させたのは正にこの時代であつたのである。

## 五

マルクス家は百五十年間にわたってトリエルの町に住み、代々ラビ(ユダヤ法律博士)を出しているユダヤ系の家柄であった。マルクスの父はもとヒルシュェルといったが、キリスト教に改宗後ハインリヒと呼んだ。法律家であったが、一八一五年、モーゼル地方がプロシヤ領に編入されるときに、トリエル裁判所付の弁護士となり、一八二〇年には新設のトリエル地方裁判所所属となり、後に法律顧問官の称号をうけ、多年弁護士会長をつとめた。トリエル第一の住宅街ブリュッケン通りの美しいバロック風の家に家族と共に住まい、法律関係の依頼者も頗る多く、高い社会的尊敬をうけていた。

父ハインリヒはフランスの啓蒙思想を奉ずる開明な自由主義者であつて、「ヴォルテールを暗誦し、ニュートン、ロック、ライプニッツと同じく」遙かなる神への漠然たる信仰を公言する「真の十八世紀的フランス人」であつたといわれ、彼が特に私淑したのはデイドロ、ヴォルテール、ラシーヌであつたといわれる。一八三〇年初め頃、ハインリヒはトリエルの穏和な立憲党の指導者となつていたが、当時ライン地方に可成り拡がつて、プロシヤ政府の反動政策と共に益々盛んとなつたフランス熱には直ちに同調することはできなかった。彼はナポレオン崇拜を喜ばず彼の軍事的独裁よりも、むしろ啓蒙君主、すなわちヴォルテールやダランベールに取り巻かれた「王座の哲学者」、合理主義者、アンシクロペディスト、啓蒙主義運動の推進者としてのフリードリヒ大王に深く惹かれた。しかしプロシヤの絶対主義的官僚政治が相次いでその無能ぶりを暴露するにつれて、プロシヤに対する反感は高まりつつあつたが、七月革命を契機として伝統の親フランス精神が再び強くこの地に抬頭してきた。

伝来のフランスの啓蒙思想の復活に加えて、新たに当時フランスで流行していたサン・シモニスムが入つてきたのである。それは、一八三二年の初め、トリエルに程近いフランスのメツス教会がライン地方に向つてサン・シモニスムを強力に宣伝したためである。<sup>(1)</sup>この時、サン・シモニスムの盛行はカトリシズムを危くするものとしてトリエルの大司教ハマー(Hammer)は、同年二月の初め直ちに管下の全僧職に対して「サン・シモン派の策謀」と題する回状を發して警告したが、その中で、

大司教はサン・シモニスムを単に支持することのできない、しかも堅実さを欠いているだけでなく、また国家にとつても、カトリック教会にとつても同様に危険なものであると非難した。<sup>(2)</sup>

それから少し後れて、一八三五年には、「Beleuchtung der Förster'schen Kritik der gerühmten Destillirgeräthe」という小冊子がトリエルで出版された。著者はドイツの最初の社会主義者といわれているルードウィッヒ・ガル<sup>(3)</sup>(Ludwig Lampert Gall, 1790—1863)であつて、本書はサン・シモニスムのドイツ布教者として、サン・シモニスムをドイツに宣伝することを目的としたものである。この書物について、ここで述べるいとまはないが、一八三五年といえればマルクスは十六歳、丁度トリエルの高等学校を卒業する頃であつて、無論マルクスによつて読まれたことと思う。またフランス占領時代からトリエルには「文学カシノ協会」(Literarische Kasino-Gesellschaft)という教養ある人ならば誰でも会員になれるという民主的な社交クラブがあつて、トリエルの社交の中心となつていた。マルクスの父ハインリヒ、ガル、高等学校長のヴィッテンバッハなどいずれもその会員となつており、かねて、その自由主義傾向のために官憲の監視をうけていたが、ガルを中心とするサン・シモニスム研究に利用されていることが發覺して解散を命ぜられることとなつた。<sup>(5)</sup>

(1) d'Allemagne; Les Saint-Simoniens 1827—1837, Paris, 1930, p. 153.

(2) d'Allemagne; op. cit., p. 152. Weill; op. cit., p. 63.

(3) Gall 及び Georg Adler; Die Geschichte der ersten sozialistischen Arbeiterbewegung in Deutschland, 1885, 6. 及び Brügel, Kautsky; Der Deutsche Sozialismus 1931. 參照スルナ。

(4) Gurvitch; La vocation actuelle de la sociologie 1950, p. 576. Lefebvre; Pour connaître la pensée de Karl Marx. 邦訳 77.

(5) Bottomore, T. B.; Karl Marx. Selected Writings in Sociology and Social Philosophy. 1956, p. 9. Nicolaiewsky, Maenen-Helfen; Karl Marx 1936, p. 8-10.

マルクスの思想形成について語る人は、彼のハインリヒの精神的指導のことに次いで、父の親友であり、後に彼自身の義父となるべきルードウィッヒ・フォン・ヴェストファーレン (Ludwig von Westphalen) の人格的影響に言及することを忘れないが、しかしこの若きマルクスに初めてサン・シモンの思想への関心を起させたその人が、外ならぬこのヴェストファーレンであったことを聞けば恐ろしく意外に思うであらう。

ヴェストファーレン家はマルクス家と異り、立派な家柄と高い位階をもつプロシヤの貴族であったが、ルードウィッヒには「東エルベの貴族風も、古いプロシヤの官僚風もなく」(メーリング) 民族的、人種的偏見をもたず、まことに平民的な自由主義者であった。新しい領地であるライン地方に対する慎重な配慮からプロシヤ政府は有能なヴェストファーレンをトリエル政庁に派遣したのである。一八一六年トリエルの地を踏んで以来、この地は彼や彼の家族の第二の故郷となった。隣家にマルクスの一家が住んでいたのである。

ルードウィッヒは「<sup>(1)</sup> ばぬけた学者であった。彼は英語を話し、ラテン、ギリシヤ、イタリア、フランス、スペインの諸語を読んだ。彼の古典文学に対する造詣は真に驚くほど深く、ホメロスを悉く暗誦し、ことにシェークスピア、レッシングを愛読し、遊びにくる若きカールを愛撫し、彼にこれらの古典のことを語りきかせた。すでに七十歳になっていたこの老人は若きマルクスと広い庭園の丘や森を散歩するのが常であった。マルクスに初めてサン・シモンの性格や教養への興味を起さしてくれたのはこの散歩の時であった。そしてヴェストファーレン自身、熱心なサン・シモンの弟子であったと、マルクスは後年ヴェストファーレンの思い出を語っている。マルクスは心からヴェストファーレンに深い尊敬と愛情をいだいて「彼を父親のような友」と呼び、彼に「学位論文」を献げていることは人のよく知っているところである。」

(1) Bottomore, op. cit., 9. note. Maxim Kovalevsky: Two lives (K. Marx and H. Spencer) in Vestnik Evropy, LX, 1909. Kovalevsky recalls in these reminiscences that Marx spoke of his father-in-law Ludwig von Westphalen, as an enthusiastic disciple of Saint-Simon. Nicolaevsky; op. cit., p. 25.

## 七

一八三六年十月、十八歳の若きマルクスはベルリン大学法科に入学を許可されたが、彼はここでもまた不思議なことにサン・シモン主義者に巡り会うことになったのである。それはベルリン大学教授のエドアルド・ガンスである。

マルクスはベルリン大学で、最初の冬学期(一八三六—三七)にはシュテッフエンス教授の人類学、ザヴィニー教授のローマ法学(パンデクテン)、ガンス教授の刑法の三講義だけをきいている。

ガンスとザヴィニーはベルリン大学の二名物教授であったが、この二人はかねて論敵であった。ザヴィニーは歴史法学派の創唱者で自然法の存在を認めない。これに反してガンスは、熱烈なサン・シモン主義者として、過去に向う歴史法学派に対して未来の方を向くところのサン・シモニズムを対立させる。ガンスは人格の完全な解放と社会の根本的改造を目標とするすべての計画に対して熱意をいだいており、かねてサン・シモンとサン・シモン派に深く傾倒して、これとヘーゲルとを結合、調和しようとはかる。ガンスはその著 (Rückblick auf Personen u. Zustände 1836) の中で、かつて七月革命の後、パリに滞在した当時のことを回想して、サン・シモン派の人達と出会ったこと、彼らを尊敬していたことなどを物語っている。ザヴィニーやヘーゲル右派の人々と激しい論争をしていたこの自由主義ヘーゲル派のガンスがフランスから来た新思想のサン・シモニズムの中に支援を求めたことは充分理解できる。ガンスの仲間では、サン・シモニズムの研究が盛んであったが、このことは左派ヘーゲル主義の形成に無関係であったとは考えられないし、またフォイエエルバッハの「キリスト

教の本質」にも恐らく若干の影響を与えたものと思われる。<sup>(1)</sup>

一八三一年に、ヘーゲルが死んでから、ガンスはベルリンで法律、歴史、フランス革命史を講じたが、大講堂は文字通り聴講者であふれた。その聴講者の中には学生の外、官吏、士官、文士等、およそ言論弾圧時代になおかつ政治的社会的問題に関心をもつすべての人々、いわゆる「ベルリンの全部」が含まれていた。自由人ガンスの、大学でのみ許されていた自由な講演が聞きたかったのである。彼は大学の自由を実際に利用した一人であった。彼は書物の中では到底述べることができないようなことを講義し、とくにフランス革命を礼讃してやまなかった。<sup>(1)</sup>

マルクスは一八三八年の夏学期にもガンスの「プロシヤ国法」の講義に出た。マルクスがいかにガンスの講義にひかれていたか、この両課目に対するガンスの評点がいずれも「格別の精勤」であったことによつてよく知られるであろう。

(1) Gurvitch: op. cit., p. 576-7. Nicolaevsky: op. cit., 529-31. Bottomore: op. cit., 9.

## 八

サン・シモンの思想はドイツにいかなる方法で、しかもいつ頃はいっていったであろうか。

サン・シモンの弟子達はドイツに布教のため別段使者を派遣したことはなかったが、一八三〇年、ドイツに宣伝の目的でサン・シモンの主著「新キリスト教」を初めその他二三の著書にシュヴァリエ (Jules Chevalier) の解説をつけてドイツの諸大学の主なる教授へ送った。この解説の中でシュヴァリエはサン・シモン学派の目的と発展を説明し、あわせて、宗教的、科学的、産業的社会 (une société religieuse, scientifique, industrielle) の到来すべきことを付け加えた。これが恐らく、サン・シモンの思想がドイツに知られた最初であろうと思われる。この頃、「宗教と哲学に関するユーージェーヌ・ロドリゲスの書簡」

(Lettres d'Eugène Rodrigues sur la Religion et la Politique) とその附録「レッシング人類の教育」の仏訳<sup>(1)</sup>が出版されたが、このことはドイツでも知られて、ベルリンの雑誌 Der Gesellschafter は一八三二年一月卅一日の同誌上で、この翻譯のことに言及して、この事からサン・シモン学派はすでに学界の認めるところとなつていたと説明している。一八三二年七月、サン・シモン派のアルレース・デュフル (Arlès Dufour) がアンファンタン教父に、自分は近くドイツに旅行するが、その時にサン・シモン派の小冊子を携行して、頒布したいがとの相談をもち込んだ時に、アンファンタンは、狂喜してこの申し出をうけいれ、すぐ次のように答えている。

「我々はこれまで、ドイツとはまだ直接に何にもしていない。それであなたがサン・シモンの教義をドイツにもつてゆく最初の人の一人であることを喜ぶものである。きつと我々を快く迎えてくれる人達があるに相違ない。改宗させるための力があるかどうかとあなたは心配しておられるが、それはあなたの感違いだ。<sup>(2)</sup>」

このようなサン・シモン派側からの働きかけに対して、ドイツ側の反響はどうであつたであろうか。

(1) Eugène Rodrigues は Olinda Rodrigues の弟で、サン・シモン派の指導者の一人で、ドイツ啓蒙哲学者 Lessing に傾倒し、彼を師サン・シモンの先駆者の一人と考えた。

(2) d'Allemagne Henry-René; Les saint-simoniens. 1829-1837. Paris 1930. p. 152-153.

## 九

サン・シモンは久しく自国フランス以外では全く知られなかった。その弟子達の名も王政復古の末期頃まで、同じくフランス以外では殆ど知られていなかった。七月革命は久しく死灰同様であつたドイツの自由主義運動を力強く再燃させたが、この革命はまた世人をサン・シモンおよびサン・シモン学派の教義ににわかにな注目させるに至つたが、程度の差こそあれ、

若きマルクスとサン・シモニスム

ドイツにおいても同様であった。尤もサン・シモンの名が初めてドイツのジャーナリズムに現われたのは、この革命より数年前の一八二六年、すなわちサン・シモン死去の翌年のこと、ベルリンで発行されるブッフホルツ (Buchholz) 編集の「ドイツ新月刊誌」(Neue Monatschrift für Deutschland) にサン・シモンに関する長い論文と翻訳が掲載されたが、これらの論文と翻訳の題名はいずれも不明である。これ以後、サン・シモンの名は久しくドイツのジャーナリズムから姿を消していたが、七月革命を機として再び力強くジャーナリズムに登場してきた。このようにドイツジャーナリズムのサン・シモンへの関心を誘発したものが、直接には七月革命による自由主義の再燃に連なるものであることは無論のことであるが、根本的には、さきに述べた如く、この年(一八三〇年)にサン・シモンの弟子達が「新キリスト教」を初め若干のサン・シモン派の小冊子を宣伝用としてドイツの諸大学の主なる教授達に送附しておいたことによるものと推定される。

一八三〇年十月以降、公刊されたサン・シモンならびにサン・シモン学派に関するドイツ人の著書、論文、翻訳の数は急激に増加している。パトラーはその著「ドイツにおけるサン・シモン派の宗教」の中でこの時期に発表された、サン・シモンならびにサン・シモン学派に関する著書、論文、註釈、翻訳等の数について丹念に調査した結果を表示しているが、それによつて Augsburger Allgemeine Zeitung が、一八三〇年十月七日掲載の最初の記事以来約七〇を数えており、Morgenblatt für gebildete Stände は同じく同年十月廿日の最初の記事以来約廿五、Ausland 紙は十月廿日以来約四〇、Allgemeine Kirchenzeitung は十月廿三日以来約二一六という驚くほど多数に及んでいる。これを見ると七月革命を機として、サン・シモン運動によせられたドイツ人の関心の並々でなかつたことが、はっきりとかがわれる。

特にサン・シモン主義に対する Augsburger Allgemeine Zeitung の論調は、この新聞が多くの著名な寄稿者をもっている世界的に有名な大新聞であるだけに特に注目すべきである。サン・シモン関係を主として担当したのは三名の同紙のパリ通信員であったが、同紙のかねて標榜していた記事の不偏と公正ということはこれら通信員のサン・シモン関係の記事に

も反映された。同紙のサン・シモン主義に対する態度は一言にしていえば、概して好意的ではなく、これに対して多少の危惧をいだいていたことは明らかであった。<sup>(3)</sup> Ausland 紙の論調も大体これと同様であった。Morgenblatt 紙は好意の無関心を示した。「アウグスブルク一般新聞」と正反対の立場を示したのは Allgemeine Kirchenzeitung 紙であった。この新聞紙の厳格なプロテスタント的傾向、その学問的主張、その神学的傾向から当然予期されるのは気品ある態度であるわけであるが、実際はそうでなく、その論調は節度を忘れた狂気じみた攻撃的態度であった。<sup>(4)</sup> いずれにしてもサン・シモン派に対するドイツの世論の態度の主なる特徴はサン・シモン主義は油断がならないという懸念であった。<sup>(5)</sup> ゲーテもまた一八三〇年十月のこと、エッケルマンにサン・シモン主義者についての消息を求めており、サン・シモン主義者の唱えるところが、自分本来の幸福を思う前に、まず社会全体の幸福のために働くことにあると知ると、彼はサン・シモン主義者は人間の自然の感情や社会にとつて真に有利な仕事を架空的に顛倒するものであるとして彼らを非難している。<sup>(6)</sup> ゲーテもまたサン・シモン主義者に対して消極的であった当時の知的ドイツ人の態度とはほぼ相通するものであった。

- (1) Butler, E. M.: The saint-simonian religion in Germany, A study of the Young German Movement. 1926. p. 53.
- (2) Butler; op. cit., p. 52—59.
- (3) Butler; op. cit., p. 61—62.
- (4) Butler; op. cit., p. 62—63.
- (5) Butler; op. cit., p. 63.
- (6) ゲーテが後までもサン・シモン主義に好意をもっていなかつたことは、彼がカーライルにサン・シモン主義から遠のくように勧告したことも明らかである。Eugène d'Éichthal; Carlyle et le saint-simonisme. (Revue historique, 1903).

一八三二年の末頃になつてもドイツでは遂に熱心な弟子を獲得することはできなかったけれども、若干の優れた人物の注目する所となつた。<sup>(1)</sup>その優れた人物の一人は著名な法学者ワルンケーニヒ博士(Warukönig)であつた。

ワルンケーニヒは一八三一年にサン・シモン学派とカント、フーゴー、シェーリング、ヘーゲル等の哲学との間に存在する関係を究明した論文「フランスにおける法哲学」を雑誌「外国の法学及び立法批判時報」*Kritische Zeitschrift für Rechts-wissenschaft und Gesetzgebung des Auslandes*に発表した。<sup>(2)</sup>

この論文の中でワルンケーニヒはサン・シモニズムをプラトーンの共和国やトーマス・モアの思想やデイドロの自然法典(3)と全く同様な一つのユートピアと認めてはいるが、しかし、サン・シモニズムの構想が遙かに実践的であるということに認めて、次のように述べている。

「世人をサン・シモンの教えにひきつけるものは決してそれが新しいという興味だけではない。彼らの教説は現代の激動の真中であつて、毎日フランス国民の知識層の間に益々痛感されつつある道徳的要求に答えるものである。今日の諸事態はフランスの自由主義の諸原理が専ら消極的であつて、すべての社会制度の解体と破滅しかもたらさないものであるということ、殊にこの原理が教養あるすべての人々を鼓舞するところの宗教的感情を満足させる力がないというこの憂鬱な真理を日増しに証明する傾向がある。他方において、フランスの聖職者の胸中に発達したような今日のキリスト教もまた同様に、このような成果を獲得する資格をもたないことは明らかである。だから人々が、現代の科学や文明と相並んで前進することができるような宗教的体制に心から愛着を覚えるということは、驚かなければならないことであろうか。<sup>(4)</sup>

更にワルンケーニヒはサン・シモニズムとドイツ古典哲学との関係について述べているには、サン・シモニズムはドイツ国民にとって、何ら新しいことを教えない。というのはサン・シモン派の教義の言明している思想の大部分は、すでにカント、フーゴー、シェーリング、ヘーゲルらによつて認められ、かつ表明されているからである。「ドイツにとってサン・シモ

ニ主義者の所謂新しい学説というようなものはない。カント以来ドイツ哲学史は、サン・シモン派の体系の基盤に横たわつていようなすべての思想を生んでいゝる。

サン・シモン主義者の教義の中にはカントやフーゴーやシェーリングやその他多数の自然哲学者の見解と主張とが全く奇妙な方法で互に混合して一つの宗教的、政治的体制を成している」と。<sup>(5)</sup>

ワルンケーニヒを初め、当時、サン・シモン学派の批評のために筆を取つた著作家や訳者の数は決して少なくはなかつたが、これらの批評家が一齐に口にするのは、今日サン・シモン主義者はドイツの門戸を叩いて、聴衆を要請しているが、それは空しい努力である。ドイツはこのような犯罪的な馬鹿げた事に注意を払うには余りに堅固なプロテスタントであり、余りに哲学的に高い訓練をうけている。「ドイツ人はプロテスタントイズムの輝く甲冑を着て、哲学の剣をさしているので不死身である。サン・シモン主義の運動はドイツでは決して有力となることはできないであろう」と主張した。<sup>(6)</sup>

ところが事實はこれらの予想を裏切つて、サン・シモン主義の運動はドイツで日増しに隆盛となり、これに関する書物は知らぬ間にふえ、相次いでいろいろな雑誌の中で論評され、サン・シモン主義についての論説や記事や注解などが紙上に氾濫し、翻訳などが続々と出版されて、食うように読まれ、パリを旅行するドイツ人は必ずテイブー・ホール(Salle Tailouit)の集会をのぞいて、帰国してからその印象記を出すという有様であつた。<sup>(7)</sup>一時的であつたとはいへ、当時におけるドイツのサン・シモン熱の激しさが想像される。サン・シモン派の雑誌「地球」(Le Globe)はラインの彼方においても読まれ、當時の有名な閨秀ラーニエル(Rahel Varnhagen von Ense)は「この雑誌を「食べなければならぬ毎日のパン」(Le pain quotidien qu'il faut avoir)とまで呼んでおり、またこの「地球」誌はドイツの雑誌や新聞に現われたサン・シモン関係の記事を一つ残さず引用し、紹介し、プロシヤのことに言及して、いかなる国もプロシヤほどサン・シモン主義に対して深い注意をささげた国はなかつた」とまで言明している。<sup>(8)</sup>またドイツの一雑誌はプロシヤの一君侯がアンフアンタンとバザールのために

若きマルクスとサン・シモニズム

その全財産を与えたなどという噂<sup>(9)</sup>を立てるなどサン・シモン熱の程がうかがわれて誠に興味深い。一八三二年の初め頃には、メッスの教会までがラインの諸邦への伝道に乗り出したのでカトリック聖職者の憂慮するところとなり、遂にトリエルの大司教ハマー (Hammer) は同年二月の初め管下の僧職に対して「サン・シモン派の策謀」(Méeses saint-simoniennes) と題する回状を發して軽拳を戒めたが、この回状の中で大司教は、サン・シモン派という新しい異端の教義を、大いに鼻持ならぬ、堅実さを欠いているだけでなく、また国家にとってもカトリック教会にとっても同様に危険千万のものであると非難したのである<sup>(10)</sup>。

- (1) Carové, W.: Der Saint-Simonismus und die französische Philosophie. 1831.
- Schiebler, K.: Der Saint-Simonismus, oder die Lehre Saint-Simons und seiner Anhänger. 1831.
- Bretschneider, K.: Der Saint-Simonismus u. das Christenthum. 1832.
- (2) d'Allemagne; op. cit., p. 153.
- (3) 上の項及び「自然法典」の著者はネイドロであると思われるのである。
- (4) d'Allemagne; op. cit., p. 153.
- (5) Butler, E. M.: The saint-simonian religion in Germany. A Study of the Young German Movement. 1926. p. 65.
- (6) Butler; op. cit., p. 64—65. 66.
- (7) Butler; op. cit., p. 66.
- (8) Weill, Georges; Le saint-simonisme hors de France. (Revue d'histoire économique et sociale. 9. Année 1921.)
- (9) Weill, Georges; L'École saint-simonienne. 1896. p. 62.
- (10) d'Allemagne; op. cit., p. 153. Weill; op. cit., p. 63.

サン・シモンニスムのドイツ流入について忘れることのできないのは「若きドイツ」派(青年ドイツ派 Das junge Deutschland)の文学的運動である。七月革命はドイツに民主主義的傾向の濃い政治的詩人の一団を生み出した。彼らは文学を時代の政治的、社会的、精神的、要求に應じて、これに奉仕すべきものであると考えた。彼らは政治的詩人といっても、政府に反抗すべき政党などを持ち合せているわけはなく、ただ文筆の上で絶対主義に対する不満をもち出す程度であって、その活動は一般の読者に対して、民主主義的思想を鼓吹し、宣伝するというにすぎず、彼らの作品や詩にはなお多分にロマン主義の遺物が跡を止めていた。<sup>(1)</sup>この種の文学者の一団が文学史上一般に「若きドイツ」派(青年ドイツ派)の名で呼ばれ、ハイネを初めとして、グッコー、ラウベ、ムント、ヴィーンブルクらがこれに属していることはすでに人のよく知っているところである。この「若きドイツ」派は当時いかなる評価をうけていたであろうか。たとえばその一例にエンゲルスの次のような文章がある。

「ドイツ文学もまた一八三〇年の諸事件(七月革命のためにヨーロッパ中が投げこまれた政治的興奮の影響を被った。粗雑な立憲主義、またはそれ以上粗雑な共和主義が当時の作家達の殆どすべてによって説教された。彼らの作品中の才能の不足をば、人目をひくような政治的諷刺によって補うことが、益々一般的な習慣となり、殊に低級文士達において著しかった。詩であれ、小説であれ、評論であれ、小戯曲であれ、あらゆる文芸作品をとってみても、「傾向」と呼ばれるところのもの、すなわち反政府的精神の多かれ少なかれ臆病な表現で満たされていた。一八三〇年以後、ドイツにみなぎっていた思想的混乱を完成せよとばかりに、これらの政治的反対の諸要素と、不消化な、大学時代にうる覚えのドイツ哲学と、まちがって聞きかじったフランス社会主義、特にサン・シモンニスムとがまぜ合わされていたのであった。そして、こういう異質的な思想のよせあつめたものをひねくりまわしていたところの作家の一味がおこがましくも「若きドイツ」派だの「近代」派だのと自称している。彼らはその後自らの若気の過ちを悔い改めたが、その文体の方は一向に改まらなかった。」<sup>(2)</sup>

驚くほど烈しい言葉である。「若きドイツ」派の文学史上の業績に対する一般的評価は無論決して芳しいものではなかった。このことは史家クロチエについてみてみてもわかる。それにしてもエンゲルスの評価が漫罵と悪意に充ちた、まことに過酷のものであることは明らかである。筆者が敢てエンゲルスの評言を引用したのは、右の一節の中に、はからずも、本稿の問題としている「若きドイツ」派とフランス社会主義、特にサン・シモニスムとの関連が極めて断片的ではあるが、エンゲルスによって示唆されているからである。かりにエンゲルスがいうように「まぢがって聞きかじったサン・シモニスム」であったにせよ、ともかく前記のドイツ・ジャーナリズムと相前後し、相携えてサン・シモニスムをやや系統的にドイツに移入して、シュタインやマルクスや真正社会主義の人々に媒介したのは、外ならぬこの「若きドイツ」派の人々であつて、この先駆者的な功績はロレンツ・フォン・シュタインやグリーンやマルクス等の大きな影にかくされて、とかく忘れられがちであるが、むしろエンゲルスの嘲評に代つて、大いに感謝されるべきであり、ドイツ社会思想史の上で当然然るべき評価が与えられるべきであらうと思う。

(1) 相良守峯、ドイツ文学史、近代篇、五二―五三。

(2) マルクス・ルエンゲルス文学芸術論、大月版、二七七頁、革命と反革命(岩波文庫版)二四―二五。

## 十二

ハイネ、グツコー、ラウベ、ムント、ワインバルクを一味とするこの「若きドイツ」派の中でも、特にすぐれた抒情詩的天分を以て、この派の牛耳をとり、しかもサン・シモニスムのドイツへの移入に最も貢献したのはハインリヒ・ハイネであつた。

ハイネは一七九七年、すなわちマルクスの出生に先立つこと廿一年、マルクスと同じくライン地方の明かるい活気ある町、立ち遅れた封建的ドイツの中で、逸早く資本主義の曙光を放った都会デュッセルドルフに貧しいユダヤ系商人の子として生まれた。ドイツ思想史上においては、四人のユダヤ人(ベルネ、ハイネ、マルクス、ラッサール)が不滅の足跡を印したといわれているが、ハイネは実にその一人であつた。

当時のこの町は政治上においても教育上においてもフランスの統治下におかれ、ライン地方の人民は一応、これまでの封建的隷属から解放され、信印の自由も認められ、特にユダヤ人はその久しい奴隷的状态から解放されて、市民権さえも与えられた。それゆゑ解放者たるナポレオンに対する一般人民、わけでもユダヤ人の感謝と崇拜の念は並々ならぬものであつた。ハイネが最初の自由主義の教育を受けたのも、このフランス支配下の時代であつた。しかるにこの歡喜も束の間、ウィーン会議による反動来と共に、事態は逆転して、ユダヤ人は以前にも増して、残忍なる迫害をうけるに至つた。ハイネの思想的生活もマルクスやラッサールなどと同じくユダヤ人問題の解決を目指して始められた。

ハイネはマルクスと同じく初めボン大学に、次いで、ゲッチンゲン大学を経て、ベルリン大学で文学と法学とを学び、この間、当代の碩学シュレーゲルやヘーゲルの講義をきいている。ベルネ、マルクス、ラッサールと同じく暗いユダヤの血をうけたことはハイネをして人類の解放者としての政治的詩人たらしめた決定的要因となつている。ハイネがユダヤ人の社会的圧迫に抗して実際の闘争に立ち上つたのは一八二二年の夏、ベルリン大学入学二年目のことであつた。これよりさきベルリンには、ユダヤ人に自らの解放闘争のための能力を養うことを目的として数名の有為のユダヤ青年によって設立された「ユダヤ人文化学術協会」があつたが、ハイネはこの協会に、この協会の事実上の指導者であつたガンスの紹介で入会して、熱心に仕事に協力した。この人物こそ、後にベルリン大学の教授として、マルクスの在学時代に法学を講じ、マルクスを指導したあのエドゥアルト・ガンスその人であつたのである。

若きマルクスとサン・シモニスム

ガンズは一方においてヘーゲル哲学を奉ずると共に他方においてサン・シモニスムに深く傾倒し、この二者の結合、調和をはからんとした。ベルリン大学在学中のマルクスはこのガンズの刑法とプロシヤ国法の講義に出席し、特にこの兩科目を「格別に勉強」したということが大学当局の講評に記されている。恐らくマルクスは講義の間にガンズ教授の口から親しく、サン・シモニスムのことを学んだことであろうと想像される。

しかし、この協会を通じて試みられたユダヤ人解放運動も、結局のところ、ユダヤ人大衆の偏狭と無理解のために失敗してしまつた。しかし、被圧迫者としてのハイネの脳裡には、迫害者への憤りと憎しみとユダヤ人の権利と市民的平等に対する悲願とは彼の生涯を通じて、彼のいろいろの作品の中に様々の形で反映されたのである。

## 十三

一八三〇年に勃発したフランスの七月革命は、かねてドイツの依然たる封建的絶対主義とその下に呻吟しているドイツ民衆のみじめさと無気力さとに政治的絶望を感じていたハイネの心を大きくゆり動かした。いまや自由の国フランスでは封建制の最後の吊鐘がなり、久しい待望の新しい人類の自由への門戸が開かれたとハイネを狂喜させた。この革命の反響はたしかに全ヨーロッパ的ではあつたが、ドイツでは若干の小波瀾をのぞいては、依然として動揺しなかつた。ドイツでこの革命に奮い立ったのは、一般人民ではなく、ベルネ、ハイネ、グッコー、プラーテンなどの文学者を含む一部の自由主義者だけであつて、彼らの一時的な昂揚も、まもなく政府の弾圧の前に消えてしまつた。

フランスには明るい自由と民主主義とがある。かねて祖国の惨めさ、頼りなさ、加えて官憲の圧迫に苦しんでドイツ脱出を考へていたハイネは一八三一年五月、「アウグスブルク一般新聞」の政治通信員としてパリに移住した。あたかもマルクスが資本主義生産方法を研究するための典型的な場としてイギリスのロンドンを選んだように、ハイネは人類精神の自由と

解放を求める恰好の場として自由の都パリを選んだともいうことができよう。

パリで新聞記者となつたハイネは、ドイツに対しては、フランスの情勢について報道し、フランスに対してはドイツの哲学、文学、宗教などについて紹介することにとつとめた。このようにドイツとフランス相互の文化的な理解と交流につくした彼の功績はスタール夫人の「ドイツ論」(De Talliemagne 1810)と共に高く評価せらるべきものである。才気煥発なハイネはパリのサロンで歓迎されて、ユーゴー、バルザック、ミュッセ、サンドなどの交友をえた。

パリの土地を踏んでから、まもなく、ハイネの精神生活には重大な変化がおこつた。それは彼が、この地で当時盛行のサン・シモニスムを知つて、一時は全くその虜となつたことである。一八三二年五月、ハイネは、フアルンハーゲン宛の書簡の中で「僕は目下フランス革命史とサン・シモニスムに没頭しています。が僕はもつと研究しなくてはなりません」と当時、新思想に接した時の感動した心境の一端を洩らしている。彼がパリに來た頃はサン・シモニスム流行の絶頂であつた。それから数ヶ月後には、婦人解放の問題にからむ内部対立から次第に衰えを見せた。一八三二年一月には、政府の命令でサン・シモニスムたちの集会所は閉鎖を命ぜられ、関係者は法律的責任をとられるに至つた。<sup>(1)</sup>ハイネはサン・シモニスムの教父といわれたアンファンタンやシュヴァリエやその他のサン・シモニストたちと個人的に親しく接触して、いつしか、この派の熱烈な信奉者となつた。左記のハイネの通信は彼が一時いかに深くサン・シモニスムに傾倒していたかを物語っている。

「サン・シモニスムは決してキリスト教における一つの宗派でもなければ、特殊の結社でもないし、改良運動でもない。それは、実を言えば、イエス・キリストの宗教の範囲外にあつて、キリスト教の領域を新しい領域に結合しようとする一つの新しい協会である。

サン・シモニスムの中には、幾千の光線によつて、社会的並びに個人的存在のすべての方向を照らすところの普遍的な思想が存在する。この思想の生命力は自分本来の力によつて行動し、拡大するほど強力である。この思想の中には自明で、且

つ不滅の實在が存在する。

サン・シモニスムは数世紀の方、宗教、哲学、教育および政治が空しく企てたすべてのことを成しとげた。それは現代の不幸を救済し、我々の最も野心的な夢想ですら敢て待望しようとしなかったような未来を我々に予見させるものである。その知的部分や道徳的部分は我々の聖人、我々の学者、我々の博愛家、ならびに我々の政治家たちが、今日まで提供したものの、もしくは確立したところのすべてのものの上にある。これらの思想を伝道する人々は最も決定的な推理に最も精力的な熱意を結合するものである。

私はフランス政府がサン・シモン派の追求を始めたという報を聞いたその日にこの信仰告白を書くのだ。私はこの宗教に限りなく加えられる冷笑と中傷の真中で書くのだ。人々はこの宗教をつぶすことができると思っている。よろしい。私は声高く宣言しよう。サン・シモニスムの今日の形は打ち砕かれるかも知らぬ。その首領たちはその仕事を妨げられるかも知らぬ。その上彼らの中にはペテン師や野心家や利己主義者が居ることも考えられないことはない。しかしそんなことが何であらうか。彼らの思想はその力と共に健在であるであらう。私は新教義の最も熱烈な讚美者である。私はますますこの教義を理解し、そしてその崇高な高所にのぼるために私の時間と努力とを献げようと思う。<sup>(2)</sup>

一八三五年ハイネは新著「ドイツについて」(De l'Allemagne 1835)をアンフアンタンに献げている。彼はサン・シモニスムを「どこにも存在している、そしてどこにも存在していないところの目に見えぬ都会」と呼んだ。<sup>(3)</sup>彼の主著である「ロマン派」(Die romantische Schule 1833)や「ドイツの宗教と哲学の歴史」(Zur Geschichte der Religion und Philosophie in Deutschland 1834)はいずれもサン・シモニスムの理論によって基礎付けられたものである。<sup>(4)</sup>

かくの如く一時は全く完全なサン・シモニアンと化したハイネも、次第にサン・シモニスムに対して批判的となっていた。このようにして、サン・シモニスムはすでに一八三〇年代の初めに、フランスからドイツに移入されたのであるが、こ

の過程において、ハイネの著作や「アウグスブルク一般新聞」への通信がはたした宣伝と啓蒙の役割がいかに大であったかが知られよう。試みに一八三〇年代の初めといえば、マルクスはまだ十代の少年でトリエルの高等学校在学中のことであり、ドイツにフランス社会主義を初めて組織的に教えたというロレンツ・フォン・シュタインの名著「現代フランスの社会主義と共産主義」(Lorenz von Stein: Der Socialismus und Communismus des heutigen Frankreichs 1842)の出版に先んずること約十年である。ハイネの先覚者的努力に敬意を払うべきである。

- (1) 井上正蔵「ハインリヒ・ハイネ」岩波新書版、一〇四—一〇五。
- (2) Le Globe, 26 Févr. 1832, d'Allemagne; op. cit., p. 153.
- (3) Butler; op. cit., p. 104, 112.
- (4) この点の詳細は次の機会に述べたい。なおこの点については Henri Lichtenberger; Henri Heine, penseur paris, 1905, p. 100—133 参照。

#### 十四

ハイネとマルクスが初めて会ったのは一八四三年の末、パリにおいてであった。

これよりさきマルクスは「ライン新聞」がプロシヤ政府の弾圧のために廃刊のやむなきに至ったので、かねてルーゲと計画していた「独仏年誌」をパリで発行するために、新婚のエンニーと共に、一八四三年十月下旬この地にきた。マルクスがパリに来た時、ハイネは丁度ハンブルグに旅行していた。ハイネは故国を去って十二年ぶりに初めて母親を訪ねると共に出版業者カンペと仕事の上で交渉をするためにハンブルグに帰ったのである。十二月パリに戻り、ルーゲを通じて初めてマルクスを知ったのであるが、自分より廿才位も年少のマルクスと意外に意気投合し、その後は親しく交際することとなっ

若きマルクスとサン・シモニスム

た。「独仏年誌」第一巻は翌一八四四年二月下旬に発行されたが、これにハイネの作品「バイエルンのルードウィヒ王讃歌」(Lobgesänge auf König Ludwig von Bayern)が掲載されたが、ハイネはこの一文を自ら最もすぐれた作品の一つであるといっている。

厳格で容易に人を容れなかったマルクスもハイネに対して終生、珍しく寛容で、彼のために友情の数々<sup>(1)</sup>を示している。またハイネはマルクス夫妻から美学上の好意ある忠告や訂正をうけたといわれている。

マルクスはハイネの才能を高く評価し、彼の作品に対して常に敬意を表していた。「マルクスは近代作家の中でゲーテとならんで特にハイネに親しんだ」<sup>(2)</sup>(メーリング)といわれ「談話の中でハイネやゲーテを引用し、その作品を暗誦さえしていた」<sup>(3)</sup>(ポール・ラファルグ)といわれている。ハイネと初めて会った頃のマルクスはすでにブルードンの「財産とは何か」、デザミの「カペーの無実の罪とその事件」やルルー、コンシデラン等フランス社会主義者の著書<sup>(4)</sup>やシュタインの「現代フランスの社会主義と共産主義」などを読んで、サン・シモニスムに関する一応の知識と関心とをもっていたものと考えられるが、パリへ来て、サン・シモニスムに通暁するハイネとの個人的接触から一層これに対する知識と関心とを深めたであろうと想像される。

(1) Mark-Engels-Lenin-Institut; Karl Marx. Chronik seines Lebens 1934.

邦訳 マルクス年譜 三三、四四、六八。ハイネとマルクスとの関係については Walter Victor: Marx und Heine. Berl., 1953.

(2) マルクス・エンゲルス文学・芸術論、国民文庫版、一八八。

(3) 同上、一八二。

(4) マルクス年譜、一八。

尚、ハイネについては井上正蔵「ハイネリヒ・ハイネ」(岩波新書)に負うところが多い。

## アダム・スミスとエドマンド・バーク (一)

—その社会観と経済思想をめぐって—

白 井 厚

### 一、二人の交友

#### 二、D・ヒュームの二つの道

補論1 W・ゴドウィン<sup>(1)</sup>のバーク観

(以上本号)

### 一、二人の交友

A・スミスの名は直ちに「諸国民の富」と結び付き、E・バークの名はその著「フランス革命の省察」を想起させる。前者はイギリスの産業革命前夜たる一七七六年の出版であり、後者はもちろんフランス革命勃発後の一七九〇年に現われたため、スミスとバークの間にはいく分の時代の隔りを感じやすいけれども、実はバークがスミスの出生におくれることはわずかに六年で、しかも奇しくもほとんど同じ年齢に達した後あいついで世を去っているところから、二人を先ず「同時代人」と呼ぶことができよう。一方は興隆期の産業資本を背景とした経済学者、他方はブルジョア・貴族のイデオログとして活躍した政治家、一方は古典派経済学体系の樹立者、他方は保守主義イデオロギーの樹立者、一方はスコットランド人、他方

アダム・スミスとエドマンド・バーク (二)